

よい語り わるい語り 18 図書館に来てくれた人にどういふふうになすわってもらうか

図書館や公民館からものがたりライブを頼まれて、当日おじゃまする。

まず会場を見せてもらう。

すると、ぼくから見て手前にカーペットかゴザを敷き、奥に椅子を並べてあることがけっこうある。

これは子どもは前で床にペタンとすわり、大人は後ろでいすになすわることを想定しているのだろう。

話はここから始めなければならない。

では子どもは床になすわる方が嬉しくて、大人はいすになすわる方が嬉しいだろうか？

きちんとした数字は持っていないが、生活様式の変化に伴い、すでに家ではいすで暮らしている子の方が多いと思われる。

少なくとも、ぼくが小学校で子どもたちに「アンケートをとります」と言ってこれを聞くと、いすでごはんを食べている子の方がだいぶ多い。

子どもはいす派だ。

では老人たちは床にペタンとすわる方が好きだろうか？

みな、子どもの頃は畳で暮らしてきただろう。

だが、老人たちはたいてい腰や膝に不安をかかえていて、いすの方が楽だと言っている。いすになすわりたいがる。

老人たちもいす派だ。

床がありがたいというのは乳児を下に寝かせられる母親と

一か所にとどまっていられない幼児くらいではないだろうか。

だから開場すると後ろの椅子の方から埋まっていき、前のカーペットの方はがらがらで、まんなかに変なすきまができることがよくある。

それで語り始めると、いすの人たちと無意味に遠くてやりにくい。

このカーペット組といす組の割合を事前に読むのはとてもむずかしい。

たとえば開場のとき、スタッフが「小さいお子さんは前、大人は後ろでお願いします」と

声をかけることがある。

これは「前の方が良い席である」という幻想と

、「子どもは前の方が見やすいだろう」という配慮と

「前の方が床に座ってくれば後ろの人も見やすいだろう」というバランス感覚による。

確かにその方が全体のすわりがよくなる気がする。

だが、それがほんとうに子どもへのサービスになっているかどうかはわからない。

なんでもかんでも前が特等席と言うわけでもないからだ。

たとえば好きなスターが出る芝居なら少しでも近くで見たいと前に行きたいと思う。

だが映画なら、見やすいから後ろの方がいいという人が多い。

コンサートもバイオリンのソロなら前で聞きたいが、オーケストラなら全体の音が聞ける後ろの方がいいかもしれない。

前で出演者の息遣いを聞けるのが嬉しいという人もいれば

へたに前に行って演者にいじられたらいやだと警戒する人もいる。

一体になるのを拒絶して、後ろの方で批評家のようにこっそり見聞きするのがいいという人もいる。

ぼくも人の講演会を聞きに行ったら、てぎれば後ろがいい。

それも横の通路側の、つまらないと思ったらすぐにそっと退席できる席がいい。

で、とどのつまり、前がいいという人と後ろがいいという人が入り混じるから全体はうまく行っている。

さらにいうと、前好きも後ろ好きもなにがなんでもそこでなければ、というわけではなく、「できればそこがいい」という程度のことだ。

ほかに席がなければ、あいているところにすわるだけで

「気に入りの席がないから帰ります」なんてことは言わない。

そんなレベルだ。

それでも、なぜ、そこがいいかといえばなんとなく「居心地がいい」からだ。

で、この「居心地がいいから」というのが、人が席を選ぶときのキーワードだと思う。

「居心地がいい場所をさがせる」「自分はどのようなのが居心地がいいのかがわかる」能力が身に着くと子どもはおもしろがり上手になっていける。

そのためには、さまざまな席にトライしてみるといい。

で自分が居心地がいいと思える場が特等席だ。

「子どもは前！」なんて一律は、子どものためのようできて、実はそうではないのだ。

また、「子どもは前、大人は後ろ」という分け方はもったいない。

ぼくはものがたりライブの理想は老若男女がみんないる状態だと思っている。

いろいろな人が同じ時間に同じ場所で同じものがたりを聞き、愚か婿の失敗に一斉に笑ったり、牛方がやまんばに見つからないようにと固唾を飲んだりする。

そういう大勢の中にいっしょにいる時、子どもは「ああ、自分だけじゃないんだ。みんなおんなじなんだ」と気づき、深く安心し、幸福感を感じる。

また、大人と子どもは同じところでも笑うが、ツボが違うこともある。

大人は皮肉な笑いとか風刺をきかせた笑いがわかる。

森の王様のライオンの失敗話が、実はときの総理大臣をからかっているのだとわかる。

また、エッチな場面を連想させる話でニヤツとすることもできる。

いっしょに聞いている子どもたちはその大人の笑いの意味を直接にはわからないが、それでも今なにかおかしいことがあったらしい、とはわかる。

自分にはまだ知らないことがある、と気づく瞬間だが、それでもなんでも、いっしょにいる親が上機嫌で笑っているのを見るのは、子どもにとってとても嬉しいことだ。

(ちなみに学校で担任の先生が素に返って笑うのを見るのも、生徒はとても大好きだ)だから、よくわからなくともいっしょに笑う。

逆に小さい子どもは話の中で同じフレーズがくりかえされるだけで、

「また、おんなじこと言ってらあ」と笑う。

大人はさすがにそんな手口では笑わない。

だが、大人から見て、子どもたちが一斉に笑っている光景はこの上なく嬉しいものだ。

その笑い声の中に自分の子どもも混ざっていればなおさらだ。

だからつられていっしょに笑う。

笑いが笑いを呼ぶ。

これが老若男女がいっしょにいるよさだ。

そういう大人と子どもに、自由に、自分の居心地のいいところをさがしてすわってもらい、結果として入り混じってもらいたいと思う。

具体的には、基本はいす席で、必要なら前の方か横の一角にカーペット席があればいい。なぜなら、図書館でのものがたりライブは60分~90分で、学校でする倍の時間がふつう。床ペッタンはお尻が痛くなるから。それは居心地が悪くなるということだからだ。

付け加えると、ぼくの新宿でのものがたりライブの制作部をやってくれている

女性陣は、ぼくがつい、自分の好きな歴史の話を始めようとする、

「時間の都合で、大人向きの話か子ども向きの話かどちらかひとつ選ぶとなったら、子どもが楽しめる話の方をしてください。

大人向きの話をすると、親は楽しめますが、でも心のどこかで

(うちの子どもは喜んでるかなあ)と危ぶんで楽しみきれません。

その反対に、子ども向きの話で子どもがゲラゲラニコニコしてくれたら、親はそれで十分楽しめるんですから」と、何度も言ってきた。

そうは言っても、どうしても大人向きの話がしくて、居合わせた子どもの客に

心で詫びながら、語り始めてしまうことはあるのだが、制作部の言い分は一理も二理も

あると思っている。